



❀ 平城宮木簡、重要文化財に指定

今年5月、平城宮第1号木簡を含む平城宮跡大膳だいぜん職しき推定地出土木簡39点が、出土文字資料として初めて国の重要文化財に指定されました（見開き参照）。平城宮跡は国指定の特別史跡で、地下に埋もれた文化遺産として唯一ユネスコの世界遺産に登録されたかけがえのない遺跡です。これまでの50年に及ぶ平城宮跡の発掘調査で見つかった遺物としても、今回の重要文化財指定は初めてのことです。

今回指定された木簡は、1961（昭和36）年と1962年に見つかりました。その後40年余りの間に奈文研が平城宮跡の調査で取り上げた木簡は約5万点、全国でも800近い遺跡から20万点以上の木簡が見つっていますが、当時はまだ木に墨で文字を記した生の史料 木簡 が大量に地中に埋もれているなどとは想像もつかないことで、「もっかん」と聞いてたいていの人は「木棺」を思い浮かべる、そんな



保存処理木簡収納状況

時代でした。この間、木簡は平城京内にもたくさん眠っていることが明らかになりました。平城宮の東南に隣接する奈良時代前期の左大臣長屋王の邸宅とその周辺から、長屋王家木簡・二条大路木簡計約11万点が出土したのはまだ記憶に新しいところです。

今回の指定で注目すべきことがもう一つあります。それは、平城宮内の大膳職という一つの役所の跡から見つかった木簡を、一括して指定していることです。木簡は完全な形で見つかるものは少なく、破片や削屑（木簡の再使用の際に小刀で削り取られたカンナ屑状の細片に文字の残るもの）の形で見つかるものがほとんどです。ですから木簡のもつ情報量に多い少ないはありますが、それらが一緒に見つかることが重要で、木簡としての価値には差がなく、私たちは完全な形の木簡も、文字の一部が残るだけの削屑も平等に扱って一点に数えています。今回の指定では、こうした考え方に則って、情報量の多い木簡、書かれている内容が重要な木簡だけを選別するのではなく、一緒に見つかった木簡を一括して指定した点にも画期的な意義があるのです。

木簡は、地下水に守られながら土中にパックされ、日光と空気から遮断された状態で初めて1200年残ってきたものです。そのため、見かけはしっかりしていても、なかはスカスカの状態になっているものもあり、乾燥は致命的です。そこで奈文研では木簡を守ってきた水を安定した樹脂に置き換えて保存処理をおこなう技術を開発してきました。今回指定された木簡も保存処理によって安定した状態になり、指定が可能になりました。

今回指定された木簡は、奈文研全体の木簡約18万点からみればごくわずかです。これらを守り後世に伝え、そのデータを公開していくことが私たちの責務であると考えています。今回の重要文化財指定が、木簡に対する理解を一層深める契機となればと思っています。（平城宮跡発掘調査部 渡邊晃宏）

発掘調査の概要

藤原宮朝堂院東門と東第二堂（飛鳥藤原第 125 次）

藤原宮朝堂院は、内裏・大極殿と並んで、宮の重要な空間であり、現在でいえば国会議事堂に相当する施設です。朝堂院には東西対称に 12 の瓦葺き礎石建物が整然と並んでいました。その外側には南北 318m、東西 235 m の回廊が取り囲み、南と北には門が開いていました。一方、発掘調査や文献史料の研究結果から、後の平城宮、長岡宮、平安宮では、東西南北の四面すべてに門が存在したことがわかっています。しかし藤原宮では、東西の回廊での門の存在は今まで未確認でした。そこで飛鳥藤原宮跡発掘調査部では、その確認を目的に、1 月 7 日から 4 月 14 日にかけて、発掘調査を実施しました。

調査の結果、東の回廊の中央付近で、大型の礎石、その据え付け穴、そして屋根から落ちる雨水を受ける雨落溝など、門の存在を裏付ける証拠を見つけました。門の南側 1/3 程度は、調査区の外でしたが、過去の調査結果なども併せて考えると、桁行 3 間、梁行 2 間、柱の間隔は 5.1 m の八脚門に復元できます。また今回の調査では、昨年春にその北端を確認していた朝堂院東第二堂の調査も併せておこないました。その結果、建物の南端部分が確認され、その建物規模が桁行 15 間（南北 62 m）、梁行 5 間（東西 15 m）であることが確定しました。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 渡辺丈彦）



手前が東第二堂・奥が東門（西から）

川原寺寺域北限（飛鳥藤原第 119・5 次）

史跡「川原寺」地内の北端で、2 月から園地整備に伴う確認調査をおこなっています。調査面積は 307 m²に過ぎませんが、遺構の密度は高く、当初予想しなかった重要な発見が相次いでいます。

川原寺は斉明天皇の川原宮の故地に、その子である天智天皇が創建したと考えられている寺です。7 世紀末頃には、飛鳥寺・大官大寺・薬師寺とならんで四大寺とされました。1957～59 年の奈良国立文化財研究所による調査で、1 塔 2 金堂形式の伽藍配置が明らかになっています。

今回の調査での最大の成果は、川原寺の北面大垣を確認し、寺域の南北の規模が飛鳥寺と同じく 3 町（330m）であると確定したことと、寺域北部で寺院付属工房を発見したことです。

調査区内には金属加工の炉跡が多数あり、大量の鉍滓が出土しました。炉跡群は川原寺の創建期（7 世紀後半）から平安後期に及び、継続的に工房が営まれた様子がうかがえます。また調査区中央では、融着した瓦が多量に出土したため、西側の丘陵斜面には瓦窯があると推定できます。

調査区南半の丘陵裾には、巨大な鑄造土坑があり、科学分析と鑄型の形から、鉄釜を鑄造した土坑と判明しました。また南端には、鉄釜鑄造に用いた溶解炉片が一括投棄されていました。これらの年代は 7 世紀末頃で、鑄鉄遺構としては最古です。奈良時代には、この鑄造土坑を壊して建物が建てられました。

6 月 9・10 日におこなった現地見学会では、平日にもかかわらず 1,350 人余りが詰めかけ、古代の技術の高さに感嘆の声をあげていました。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 富永里菜）



現地見学会の様子

平城宮東区朝集殿院東南部（平城第 346・355 次）

現在調査をおこなっている朝集殿院は、平城宮東区朝堂院南域に位置し、朝堂での執務のために出勤してきた官人が、朝堂院南門の開門時刻まで待機する場所だったと考えられています。今回の調査目的は、奈良時代における朝集殿院の内庭部の状況と区画施設の様相を明らかにすることです。朝集殿院の内庭部と外郭部および東南外側に約 1500 m²の調査区を設定し今年の 1 月から調査を継続しています。

今回の調査では、東朝集殿南側の内庭部には平城宮に関わる遺構は存在しないことを確認しました。現況の遺構検出面は廃都後に削平されたもので奈良時代の地表面は残っておらず、古墳時代の自然流路のあとや大小の穴が見られます。この面の上層には平安時代から現代にいたる堆積土が、数層確認されました。朝集殿院の区画施設については、東面と南面を区画する築地を確認しました。また、南面築地の下層からは、掘立柱塼を検出しました。しかし、東面築地の下層には、掘立柱塼はありませんでした。

南面の掘立柱塼は基壇をとまっています。現況では掘立柱を抜き取った穴が約 9 尺（2.7m）間隔で確認されました。南面の築地はこの掘立柱の抜き穴を埋め立て、さらにその上に層状に土を重ねてつき固めた「版築」技法で築かれています。

また、築地の内側では雨落溝を踏襲した溝を検出しました。この溝は、東南隅の調査区で検出された東西方向の石組溝に続いています。石組溝は凝灰岩の底石と側石が残り、東面築地の下を貫いていた暗渠と考えられます。築地の雨落溝は護岸の石などは残っていないものの、暗渠と同様に石組であったも

のが、廃都後に石材が抜き取られたものとみられません。また、南面の溝の底部には、幅約 60cm の一段深い溝があります。この溝は東面築地の暗渠を設ける際に壊されていますので、築地に先行する掘立柱塼にともなう雨落溝と考えられます。

築地の雨落溝を踏襲した溝や内庭部からは大量の瓦が出土しています。これらの瓦は築地の屋根に葺かれていたものと思われます。軒瓦は第二次大極殿や東区朝堂院から出土する瓦と同型のものがほとんどでこの型式の瓦は、745 年に再び平城京に遷都した直後の東区朝堂院の全面的な改造の際に新たに使用されたものです。したがって、掘立柱塼から築地への改築は、大極殿や東区朝堂院を礎石建瓦葺に建替えた時と同時期と考えられます。

奈良時代前半の朝集殿院東面の区画施設の位置はまだ不明です。式部省下層で確認されている掘立柱塼が、そのまま北に延びて朝集殿院の東面を区画する可能性も考えられましたが、朝集殿院東側の調査区（第 346 次）では、この南北塼の北端が朝集殿院の東までは延びないことを確認しました。この掘立柱塼とは別の掘立柱塼が朝集殿院の東面を区画していたと考えられます。また、調査区の西北では南北に並ぶ 4 本の掘立柱の抜き穴を検出しています。

この南北方向の柱列が、朝集殿院の東面掘立柱塼となる可能性もあります。ただし、この柱列では南面掘立柱塼と接続する東南隅の柱は、調査区西を通る市道の下にあたるため確認されていません。さらに別の東面掘立柱塼が、現在の水路か市道の下にある可能性もあります。

今回の調査により、奈良時代前半には朝集殿院の東西幅は朝堂院よりも広く、朝集殿院と朝堂院をあわせた区画が凸字形平面となっていたことが明らかになりました。奈良時代前半の朝集殿院の東西幅は、当時の尺で百尺単位の完数值とならない特異な状況だったと考えられます。今後、さらに周辺地域の調査を進め、また他の都城での様相の解明を待ちながら、朝集殿院と朝堂院の区画の変化の理由や意味を追究していく必要があると考えています。

なお、現場説明会は 6 月 14 日におこなわれて、雨のなかにもかかわらず 350 人余が詰めかけました。

（平城宮跡発掘調査部 山本紀子）



東面築地下の暗渠の底石（東南から）



重要文化財になった平城宮木簡（原寸）

いずれも大膳職（食料の保管と宮内の料理を担当）推定地のゴミ捨て穴から見つかったもの。1 孝謙太上天皇がいた法華寺から、平城宮内の大膳職に小豆・醬・酢・末醬を請求する木簡。764年に起きた藤原仲麻呂の乱直前の緊迫した政治情勢下におけるもの。表面からみて左側3分の1ほどが欠けている。2 宮中のしつらえを担当した主殿寮から火種を請求する木簡。3 菜っ葉を請求する木簡。4 ウニの付札。切り込みは荷物に括り付ける紐をかけるためのもの。5・6 アラメ（海藻）の付札。7 甲斐国山梨郡（現在の甲府市周辺）から胡桃を進上する荷札。天平宝字6年は762年。8 大豆の値段を書いた削屑。9 日付の書かれた削屑。10 甲斐国山梨郡の荷札の断片。



(表)

寺請
小豆一斗
醬
一斗斗力五升
大床所
酢
末
醬等

(裏)

右四種物
竹波命婦御所
三月六日

(表)

主殿寮
請火事
殿部力

十二月廿二日

(裏)

謹通
敷万呂尊所
請菜端事

謹通
敷万呂尊所
請菜端事

3

2

1

年輪年代法最前線

年輪年代法とは、樹木の年輪の幅が各年の気候（おもに気温）に対応して変化することを利用した自然科学的年代測定法の一つで、誤差のない年代が得られます。わが国では、ヒノキやスギの年輪を使って、今から約3000年前までの年代を割り出す際に基準となる暦年標準パターンができています。

古環境研究室では、歴史学の年代研究に資するため考古学、建築史、美術史などに関連した木質文化財について、この年輪年代法による年代測定をおこなっています。また、全国各地で発見される埋没樹幹の年代測定を実施し、自然災害の発生年を確定する研究もおこなっています。

現在、奈良市にある唐招提寺では国宝の金堂（奈良時代）の全面解体修理事業が進行中です。当研究室では、これを絶好の機会ととらえ、建築部材の徹底した年代測定をおこなう考えです。この調査によって、金堂建築の創建年代や改修年代を知るための重要な年代情報が得られるものと関係者から大いに期待されています。

昨年度に実施した研究の成果の1つとしては、金堂

隅鬼の年輪年代が確定したことが挙げられます。この彫刻は、四隅の軒先の尾垂木と隅木のあいだにあって、高さは約30cm前後と小振りながら、何ともいかめしい表情で鎮座しているものです。材質は4体のうち3体がヒノキ、1体がマツでした。ヒノキ材の3体について年代測定をおこなったところ、それぞれ636年（東南隅）、569年（東北隅）、504年（西北隅）と確定することができました。3体とも心材に続く辺材部が完全に失われたものばかりでしたので、原木の外周部をどの程度切削したかは不明ですが、奈良時代の創建当初のものとして間違いのないと考えています。これらの隅鬼は、わが国最古のものと判明しました。今後どんな発見がでてくるか、それが楽しみです。（埋蔵文化財センター 光谷拓実）



わが国最古のものと判明した隅鬼4体（唐招提寺金堂）

井上さん日本写真学会東陽賞受賞

飛鳥藤原宮跡発掘調査部で発掘現場や遺物の写真撮影を担当している井上直夫さん（専門職員）が、日本写真学会より東陽賞を授与されました。この賞は、日本で最初に写真工業社を興した菊池東陽氏にちなみ、写真技術の応用・普及、写真教育などに顕著な貢献をした学会員に対して毎年一人に贈られているものです。受賞理由は、埋蔵文化財の写真撮影と保存に関する技術開発に長年努めてきたこと、および『埋



キトラ古墳壁画撮影に臨む井上さん（右）

文写真研究』などの著作や講演を通じて埋蔵文化財撮影の教育普及活動に大きく貢献したことです。なかでも家庭用のデジタルカメラに小型蛍光灯と手作りの特製カメラスタンドを組み合わせ、キトラ古墳石槨内の壁画撮影に成功したことは、記憶に新しいところです。手近で安価な材料を用いて撮影時の様々な障害を克服していくのが井上さんの技術開発の真骨頂で、その創意と工夫には定評があります。また、教育普及の面では、埋蔵文化財センターの文化財写真課程研修・報告書作成課程研修の講師を務め、井上流を全国に広めてきました。

日本写真学会賞授賞式は、中央大学で5月22日に開催されました。井上さんは「文化財写真の現状」と題して記念講演をおこない、埋蔵文化財写真に対する日本の公的機関の認識の低さや予算と人員の少なさ、文化財記録をデジタルデータでなく銀塩写真画像で残すことの意義と重要性を訴え、大きな反響を呼びました。今回の受賞を契機に、文化財写真に対する評価と理解が深まることを願ってやみません。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 竹内 亮）

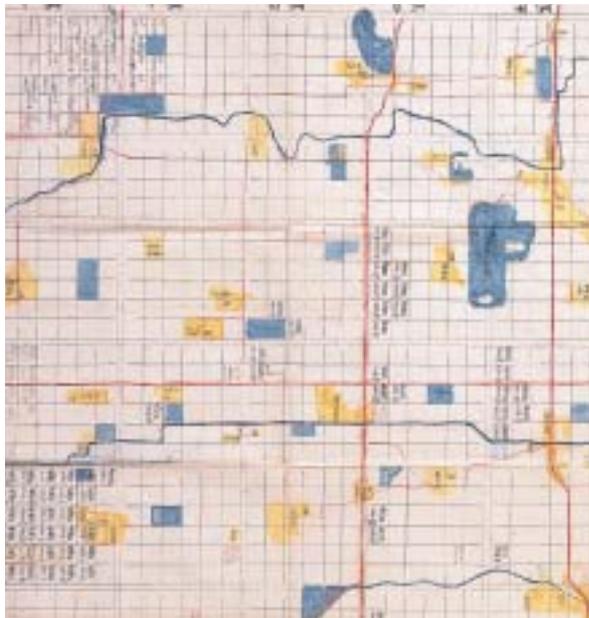
北浦定政関係資料、重要文化財に指定

奈良文化財研究所が保管する北浦定政関係資料1095点が、平城宮木簡とともに重要文化財（歴史資料の部）に指定されました。

北浦定政（1817～1871）は幕末に活躍した、宮跡・条里・陵墓などの研究家ですが、特に注目されるのは奈良盆地の条里制と、平城京に関する研究です。それまでは正確な範囲すらも分かっていなかった平城宮・平城京の構造を初めて本格的に研究した、つまりは平城宮・平城京研究の出発点に位置する研究者が、北浦定政なのです。

彼の学問の特色は、そのフィールドワークにあります。彼は奈良盆地中を自ら歩き回り、地形・地名を調べ、自作の測量車で測量までしています。そして、古代・中世の古文書に出てくる地名を現在地に比定し、その結果、古代・中世の土地制度である条里制の原理、さらには平城宮・平城京の区画を明確にすることに成功したのです。正確な地図など全くなかった時代に、西洋の学問が日本に導入される以前に、彼の独力によってこのような研究成果が達成されたのは驚嘆に値します。彼の平城宮・平城京復原案は、細部においてはもちろん間違いもありますが、全体的には今なお十分通用する復原に仕上がっているのです。

北浦定政関係資料の内容は、彼の著作のほか、彼の草稿・メモ類、彼が自ら写し取り、手許に置いていた古代・中世史料の写本、さらには和歌の短冊や



北浦定政関係資料 大和国坪割細見図

書簡などより成っています。どちらかというと、研究成果を記した著作などよりも、調査・考察の過程を記すものが多いと言えるでしょう。例えば、彼は踏査の過程で奈良盆地の状況を事細かに記録していますが、そのような記録は、開発が進んだ現在では、当時の地誌としても貴重な資料となっています。

これらの資料は、彼の死後、ご子孫によって大切に保管されてきましたが、1992年に曾孫の北浦直人氏より、研究上の縁が深いということで、当時の奈良国立文化財研究所に寄贈されたものです。

彼の研究は地味なフィールドワークに基づいたものであり、一般にはさほど知られていないかもしれませんが、その調査・研究過程を記した資料が価値を認められ、重要文化財に指定の運びとなりました。奈文研の研究の一つの大きな柱は、奈良の文化財を対象とした地道な調査研究です。我々奈文研職員も、フィールドワークの原点を忘れずに、調査研究をおこなっていく気持ちを新たにしています。

（文化遺産研究部 吉川 聡）

記録

第92回公開講演会

平成15年5月17日（土）

午後1時30分 平城宮跡資料館講堂

町田 章 所長

「考古学よもやま話 - 剣と刀」

高橋克壽 平城宮跡発掘調査部 主任研究官

「王の館 - 家形埴輪はあの世の住まいか？」

清水重敦 文化遺産研究部 技官

「館を縮める - 模型と建物の間」

講演会（NPO 平城宮跡サポートネットワーク主催）

平成15年5月26日（月）

午後3時 平城宮跡資料館講堂

坪井清足 元奈良文化財研究所長

「平城宮跡の発掘と保存」

埋蔵文化財センター研修

埋蔵文化財発掘技術者研修

写真基礎課程 5月7日～5月16日 11名

保存科学課程 5月21日～6月5日 7名

頒布刊行物

奈良文化財研究所紀要2003 1500円

DVD 高松塚古墳の歴史 3000円

VHS 高松塚古墳の歴史 2000円

* 奈良の寺（岩波新書 780円）一般書店で販売

飛鳥資料館のみどころ (1)

飛鳥資料館は、1970年12月の「飛鳥地方における歴史的風土および文化財の保存等に関する方策について」の閣議決定に基づき、1975年、明日香村に設置されました。

資料館は、1階に第1展示室、第2展示室が、地階には特別展示室があります。第1展示室には、宮殿、寺院、古墳、石造物、万葉集のコーナー、高松塚古墳から出土した海獣葡萄鏡などを展示した特別コーナーのほか近年、話題になったキトラ古墳の壁画の写真パネルなども展示しています。第2展示室には、山田寺東回廊の出土木材を組み立てて、在りし日の東回廊を再現しています。山田寺東回廊の建築年代は7世紀の中頃。法隆寺金堂よりも若干古いと考えられており、世界最古の木造建築といえる大変貴重なものです。

前庭には、明治時代に石神遺跡から出土した飛鳥時代の噴水である須弥山石や石人像、ユーモラスな表情で知られる亀石や奇怪な姿の猿石などのレプリカを展

示しており、さながら飛鳥の石彫美術館です。さらに、昨年には、八釣マキト5号墳の石室も移設復元しました。なお、須弥山石と石人像は館内で本物が見られます。

飛鳥探訪の折には、ぜひお立ち寄りいただき、飛鳥の歴史や残された文化財について理解を深めていただきたいと思います。お問い合わせは飛鳥資料館（電話0744-59-3561）まで。インターネットのホームページアドレスは<http://www.asukanet.gr.jp>です。

（飛鳥資料館 西山和宏）



飛鳥資料館

お知らせ

平城宮大極殿復原工事一般公開施設

この施設は、朱雀門・東院庭園に続き、2010年の完成を目指す大極殿の復原工事過程を広く公開し、あわせて関連資料を展示する施設です。今年4月にオープン、すでに1万人をこえる方々に見学して頂いております。ここでは、大極殿復原建築現場を覆う素屋根の大きさを体感し、工事にじっさい使う木材の加工を（窓越しではありますが）見学することで、遺跡や建物復原への理解を深めて頂きたいと考えています。各種資料展示や大画面シアター、テラスからの朱雀門展望もあわせてお楽しみください。

（文化財情報課 大山達夫）



大極殿復原工事現場の一般公開施設

訃報

松本修自さん（埋蔵文化財センター保存修復工学研究室長）

軽妙洒脱な語り口で親しまれた松本さんが7月2日夜逝去された。昭和50年入所以来、特に7世紀建築遺構の復元的研究に尽力されるとともに、各地の町並みや近世社寺建築の調査研究にと幅広く活躍された。平成5年に東文研に移られてからはそうした経験を基に遺跡・建造物の保存修復の理念と実践をテーマとされ、欧州との文化遺産保護協力を推進された。奈文研に戻られてわずか1年余。古巣に新しい風を吹き込むことを期待されていた矢先のことであった。心より御冥福をお祈りいたします。

（文化遺産研究部 清水真一）

編集後記：奈文研ニュースNo.9いかがでしたでしょうか。このNo.9では、見開きの「奈文研ギャラリー」をはじめ、飛鳥資料館の魅力を発信するコーナーを設けるなど、「読者本位」をキーワードに装いをあらたにしました。これからも、魅力ある誌面作りを心がけていくつもりです。ご意見をお寄せください。（編集委員長 千田剛道）

編集 「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <http://www.nabunken.jp>

Eメール jimu@nabunken.go.jp

発行年月 2003年7月